

自己理解のためのアイデンティティ概念の捉え直しの試み

小 沢 一 仁*

はじめに

筆者は、これまでアイデンティティを捉え直そうとする試みを以下のように続けてきた。まず、アイデンティティについてのエリクソン、E.H.の記述から、アイデンティティを社会と個人との架け橋および社会と個人との接点である「居場所」として捉えた(小沢, 1991)。これは、フロイトの精神分析における自我を、社会との相互作用の中で捉えようとしたエリクソン、E.H.の見方を考慮したものである。その後、社会と個人の相互作用だけではなく、個人が現在、過去、未来における自分を理解しようとするいくつかのエピソードから、現象学の竹田やユング派の河合の考え方を参考に、アイデンティティを「物語」として捉えようと試みた(小沢, 1992)。しかし、ここまでは、アイデンティティを居場所と物語として言い換えたにすぎない。

筆者は次に、アイデンティティ・ステータス研究の流れから心理学における研究のパラダイムを考察(小沢, 1994 a)し、心理学の目的である自己理解というスタートの確認および現象学的視点を導入(小沢, 1995 a)した。さらには、自己理解を研究の目的とする提言やモデル構成を研究の目的とする提言を受けて、心理学の研究のあり方を検討してきた(小沢, 1996 b)。以上のような作業は、現象学的視点によってアイデンティティを捉え直す基盤を整えようとした試みといえる。

本論では、先に行った日本発達心理学会での学会発表をもとに(小沢, 1996 a)、これまでの検討

をまとめ、アイデンティティを居場所と物語として捉える概念的試みをおこなう。

ここでは、まず、心理学研究において常に議論となる方法論の問題を概観する。次に、自己理解を研究の目的として設定することの重要性を述べる。その後、アイデンティティ概念を居場所と物語として捉え直し、概念的整理を行う。最後に、居場所と物語という捉え方がどれだけ自己理解に有効かを議論する。

1. 心理学研究の問題としての方法論およびパラダイム

目に見えないしかも常にわれわれが保持している、さらにはわれわれ自身でもある「心」を対象とする心理学の研究について、方法論が常に議論される。この方法論の問題は、心理学が哲学から分離し科学であろうとした中で、これまで哲学の中で扱われていた心という対象に対して、いわゆる科学的な方法論を確立する必要性があったためであるといえる。これまで筆者は、アイデンティティおよびマーシャの提唱したアイデンティティ・ステータスの研究を取り上げ、方法論の問題は、その根底にあるパラダイムの議論を必要とすることを述べてきた。そして、心という特殊性をもつ対象を考慮するには、現象学的視点を取り入れた「主観-意味構成パラダイム」の必要性と、そのパラダイムにのっとった、研究の目的、方法論および妥当性のあり方について検討を行ってきた(小沢, 1994 a, 1995 a, 1996 b)。心理学の研究において、パラダイム・方法論・概念は常にワンセットになっており、先のパラダイム・方法論の検討に引き続き、本論では、アイデンティティをめぐる概念の問題を扱う。

*本学工学部基礎・教養 講師
1996年9月10日受理

2. 心理学研究の目標としての自己理解

心を対象にする心理学という研究領域の目標のひとつに、自己理解がある。これは、心理学研究者の心理学を志した動機のひとつであり、心理学を学ぼうとして心理学に期待する学生の思いのひとつでもある。特に、学生を対象とした講義においては、学生は自己理解を第一に目指して受講していると考えられる。そこでは、専門的な概念や方法論やパラダイムの問題に関しての興味が示されることは少ない。さらに付け加えると、心理学を志した者の多くが、この自己理解に期待するという思いをもってこの学問を選択したといえる。しかし、現状の心理学を学ぶ中で裏切られたという思いをすることはよく起こりうる。このことは、単に一般者と専門家という区分をしてすまされることではない。

東(1985)は対談の中で、心理学という学問を志す動機と心理学の専門としての現状についての議論において、一般の人たちが知りたいことを研究者としてのわれわれも知りたいのは同じことと述べている。研究者と言えどもひとりの人間であり、心理学を学んでいようといまいと自分について思い悩む。そのことから心理学者と言えども、抜けでることはできない。やはり、一般者にとっても心理学研究者にとっても、自らを知ることは必要とされることである。

精神分析学またはそれに源流を持つ臨床学派においては、その理論の提唱者はクライアントに対する理解と同時に、自分自身を洞察し自らの理論を構築していったことはよく知られている。ひとりの個人であるクライアントおよび研究者自身を深く見つめることによって、一般者にも通用する普遍的な概念および理論を目指していったのである。

臨床系の学派と同様に、現在の心理学が研究として、この自己理解という目標に答えているのかどうか、という問題に答えることは非常に困難である。なぜなら、心理学の歴史の中で、先に示した科学としての実証性を追究することを第一としてきたことから、方法論の確立を目指してきた過

程があり、自己理解を研究の目標として臨床場面ではなく研究の目標として掲げられることは少なかったのではなかろうか。しかし、近年、青年を対象にする青年心理学の領域において、西平(1970)、落合(1993, 1994)などによって、青年自身の自己理解の促進を重要視する意見がなされ、白井(1993)によって、自己理解を促進する試みもなされていることを、筆者は先に示した(小沢, 1996 b)。

マスコミにおける安易でしかも自己理解には至らない、単なるラベル貼りに過ぎない心理学がもてはやされる現状の中で、心理学の研究において、自己理解を目指すことの重要性があるといえる。

3. エリクソンによるアイデンティティ概念

アイデンティティ概念は、エリクソン, E.H. (1950) がその著「幼児期と社会」によって、彼の移住先のアメリカにおいて、フロイト, S. の精神分析を自我と社会・歴史との相互作用を強調する文脈の中で提唱された。このアイデンティティ概念は、当時のアメリカにおいて民族の葛藤をもつ人々によって(無藤, 1994)、また、「異議申し立て」を行う青年によって(鑓, 1990)、受け入れられ広まっていったという。このことは、社会の変動期において、個人が自分自身を理解しようとする試みの中で、アイデンティティ概念が用いられたといえる。

日本においてもアイデンティティという言葉は巷に充分広まっており、「私のアイデンティティは……です。」とか、「自分のアイデンティティを見失ってしまって……。」という言い方で用いられている。日本においても、アイデンティティ概念は、自己理解において有効であるものであるといえる。しかし、現在は「同一性」という訳が通例化しているが、日本語としてなじまないし、日常生活の中で同一性という言葉で自分自身を表すときに用いることはないのであるが、これは、アイデンティティという言葉自体が日本語にはないことが問題である(無藤, 1994)。さらに、統一性・包括性・全体性をもつ概念(西平, 1978)であるゆえに、明確にしにくい傾向にある。つまり、アイ

デンティティという言葉は、感覚的には日常生活の中で用いることができるが、明確に定義しようとするとそれができない、やっかいな用語といえる。

現在では、アイデンティティは過去概念として、または、既成概念として、用いられているが、改めて注目されるほどのことはない状況にあるのではないか。しかし、アイデンティティ概念をあやふやのまま葬るのではなく、自己理解に至る可能性をもつ概念として捉え直す必要があり、このまま埋もれていってしまうには、勿体ない概念である。

筆者自身、学生時代に心理学を志す動機として、自己理解があった。その際、自らが青年期にあり自分自身についての葛藤をもち、その中でエリクソンのアイデンティティ概念を知り、アイデンティティという概念を学べば自分のことがもう少しわかるのではないかという期待のもとに、心理学を志した。このことは、筆者においては常に振り返ることである(小沢, 1995 a, 1996 b)。この多くの者が持つ心理学を学ぶ動機としての自己理解については、あまりに過剰な自己愛的産物になる危険はあるだろうが、特に、アイデンティティ概念に関しては、心理学の研究のひとつの目標として重要視したい。

4. アイデンティティ研究

アイデンティティ研究をみると、マーシャによるアイデンティティ・ステイタスの提唱以来(Marcia, 1966)、このアイデンティティ・ステイタスによる研究がアメリカおよび日本において盛んに行われてきている。

このアイデンティティ・ステイタスは、青年期のアイデンティティの状態を4つに分類するものである。その分類とは、現在アイデンティティの危機にいて岐路に立っている状態、過去の危機を克服しアイデンティティを達成している状態、それとは反対にアイデンティティが拡散している状態、最後に自らのアイデンティティではなく他者(権威者)のアイデンティティを身に付けている状態である。

このように、マーシャによるアイデンティティ・ステイタスの提唱は、実証的にアイデンティティを研究する道を開いたという点で、有効なものであった。しかし、宮下(1993)の指摘のように数々の問題点も指摘されている。特に、アイデンティティ・ステイタス研究の初期の頃においては、アイデンティティ・ステイタスとさまざまな要因との関連を調べられてきた。この点で、アイデンティティの状態に関連するさまざまな要因が明らかになってきた。しかし、この研究の方向性は、アイデンティティ・ステイタスというアイデンティティの状態の分類をより理解するものではあるが、アイデンティティそのものの自体は何なのかという問いに答えるものとしては、アイデンティティ・ステイタス以上の理解は得られない。また、アイデンティティ・ステイタスの変化・発達を明らかにする移行研究は、アイデンティティの状態の変化つまり、アイデンティティ発達のプロセスを明確にするという意義はあるものの、4つの分類の変化を示しただけでは、アイデンティティ自体に関してアイデンティティ・ステイタスという分類以上の理解を与えてくれるものではない(小沢, 1994 a)。

筆者ら(小沢・高木, 1988)は、アイデンティティ・ステイタスの移行を調べた際、アイデンティティの危機にある者のコメント内容から、アイデンティティ危機における葛藤の内容を分類した。この内容は、アイデンティティ危機にある者が意識する悩みを明らかにしたものであり、「葛藤の焦点」と名付けられた。このような葛藤は、アイデンティティを達成した者についても、一応の解決を得られていることではあるが、潜在することであり、青年が個人としてこれらの葛藤をめぐって悩みを語ると考えられる。この試みは、アイデンティティの内側、中身に迫る方向性にあるといえる。

近年、アイデンティティ発達のプロセスを通して、アイデンティティ概念自体を対人関係の側面を重視して捉え直す試みが、グロテバントおよびクローガーを参考に、高村(1996)、杉村(1995 a, 1996 b)によって行われている。また、マーシャら

も、アイデンティティを捉え直そうと、他者と自己の関係におけるアイデンティティ・モデルを提出している。これらの研究の流れは、アイデンティティ概念を再度捉え直そうとするものといえ、アイデンティティ概念を過去のものとしてそのままにしておくことはせず、生き生きとしたものとして活用しようとするものであると考えられる。このような流れに対応して、自己理解という目的のために、アイデンティティ概念自体を捉え直すことは重要であることといえる。

5. アイデンティティ概念の捉え直しの前提

アイデンティティを自己理解のための概念として捉え直すために以下の点をその前提として明確にしておきたい。

(1) 完全孤立・永遠不滅のアイデンティティ概念からの脱却

アイデンティティを「個人において完全孤立した永遠不滅なもの」として捉える見方が、多くの人々に蔓延している。これは、アイデンティティに対する潜在的な見方であり、講義における学生との対話および、アイデンティティ以外の心理学研究者との間で議論となるものであり、よく見られるものである。この見方は、極論すればアイデンティティを宝物であるかのように扱うことと言い換えることができる。

このようなアイデンティティに対する見方においては、拒否と崇拝の二つの対立した反応が示される。例えば、「やっぱりアイデンティティが大切なんですね。」とアイデンティティを崇め奉る者や、「アイデンティティなんて現代人にあるわけがない。」という者である。これら相対する見方の根底には、共通したアイデンティティ観があり、それは、アイデンティティを、遠い彼方にあるイデアのように、つまり、個人の中の「完全孤立した永遠不滅なもの」として捉える見方である。このように捉えられたアイデンティティ観に対して、ある者は崇拝しある者は拒絶する反応を示すと考えられる。

エリクソンは、アイデンティティにおける生涯

発達および他者および社会との相互作用を重視している (Erikson, 1959)。エリクソン自身はアイデンティティを決して、永遠不滅のものでも、一度形成されると生涯不変となるものでもはなく、生涯発達し成長し続けるものとして捉えている。また、完全孤立したものではなく、他者との相互作用のなかでこそアイデンティティはあることを示している。また、鏑 (1990) は、アイデンティティを過去から現在そして未来という時間軸および自分と他者との空間軸の交差するモデルによって捉えている。さらに、西平直 (1993) は、生涯にわたる人間形成という点から、運動としてのアイデンティティを捉えている。

これらの指摘は、アイデンティティに対する永遠不滅・完全孤立という見方を否定するものである。このような、アイデンティティを見つかることはない宝物として、または、永遠の宝物として捉えることは、自分自身を振り返ることよりも宝物への嫌悪もしくは宝物探しに熱中してしまい、自己理解からますます遠ざかってしまうことになりかねない。

(2) 鳥瞰図的な見方からの着地

次に、アイデンティティが生涯にわたって他者や社会との相互作用の中で発達していくものであるとすると、誕生から死までのライフサイクルを辿る人間をどの視点からみるかということが問題となる。

エリクソンは、エピジェネティック・チャートによって、アイデンティティが生涯に亘って発達していくことを、心理社会的危機を人生のそれぞれの段階で体験し、その危機を乗り越え解決すること、つまり、生涯に渡って危機と解決を繰り返すこととして示している (Erikson, 1959)。このように、生涯発達全体を視野に入れた指摘としては、西平 (1970) の全生活空間論と岡本 (1991) の生涯発達におけるアイデンティティ・ステータスのらせん式モデルがある。両者のモデルとも、生涯全体を見渡したところに視点を置き、その個人の人生全体、生涯全体を捉えようとする見方をとっている。

これらの見方は言ってみれば、生涯を俯瞰しその視点を鳥瞰図的に生涯を見渡せるところに、置いているといえる。このような視点は、自分の生涯を概観できるという点で、自己理解において有効であるといえるが、そのような視点と同時に、鳥瞰図から降りてきて、ライフサイクルという人生の道のりを辿る地に足を着けた視点も必要であるといえる。このような視点をとると、アイデンティティに対して生涯を見渡した視点とは違った見え方ができ、現在の自分のいるところを現在の自分の視点から眺めることは、自己理解において重要である。この道のりを辿る視点に関して、西平（1996）は、伝記研究から自分史制作への転開を述べている。

（3）現象学的視点

上記の二点の視点の背後には、フッサールの現象学の見方がある。筆者は、現象学を心理学の研究のパラダイムの模索の中で取り入れようとしている（小沢，1995 a, 1996 b）。それは、現象学の思考の展開の仕方に、心を対象とする心理学においても重要なものが示唆されると考えるためである。

現象学においては、日常生活の中からまず還元として主観に回帰する。その際、外界を遮断し主観のおこなっている志向性を捉えようとする。その志向性の解明では、さまざまな対象に対して主観がおこなっている意味構成を明らかにする。その後、今度は遮断した外界に対してもどっていく。その際に、主観によって意味構成された他者（他我）や、主観側からみて他者との意味構成の共有（間主観性）、そしてわれわれが生きている世界（生活世界）を見出す。

このような現象学は、心理学において心に対する見方として重要な示唆を得られると考えられる。第一に、主観に回帰することである。心は外界の対象と同様なものではなく、主観というわれわれ自身である。その主観であるわれわれ自身に立ち戻ることが、自己を理解する上で、その前提として自分を見つめることは、現象学における還元の矮小化かもしれないが、ある種同様の見方の

転換があると考えられる。

第二に、外界の対象は意味構成されたものであるのに対して、自己とは意味構成するものである。自己、いわゆる心というものを外界の事物と同じように対象化するのではなく、意味構成するものとして捉える視点は、心の特殊性を考慮した捉え方であるといえる。

第三に、思考の転換の方向の最後に、世界に戻っていくということである。やはり、社会との関係性を抜きにしては、個人はありえない。この往復のプロセスも、現象学の重要な点であると考えられる。

現象学の知見は、実証的に行き過ぎた心理学が省みてこなかった、研究および自己理解の根底にあるパラダイムの問題を浮かび上がらせることに、その意義がある。本論の自己理解のための試みは、いわばアイデンティティ概念を現象学的視点で捉えることと言い換えることができる。ここに今後の課題として、アイデンティティ概念が生まれた精神分析と、それとは異なる背景のもとにある現象学との間にある論理的乖離を埋める作業の必要性が指摘される。

6. アイデンティティ概念の捉え直し

実際に、アイデンティティ概念を捉えていく起点をどこに置いたらいいのかが問題であるが、エリクソンのアイデンティティ達成についての記述から論を進める。筆者は、エリクソン（Erikson, 1959）によるアイデンティティ達成の記述の中から、次の三点を抽出した（小沢，1991）。それは、第一に「社会の中に自分の適所の獲得」、第二に「同一化群の統合」、第三に「自らの sameness および continuity についての自他の承認の感覚」の三つの文脈である。

これらの三つの文脈相互の関連について考えると、適所の側面は、社会との関係における領域であり、個人と社会との接点といえる。同一化群の統合とは、個人の内的、心理的、主観的過程を示し、フロイトによる心の構造論において示された自我・超自我・エスのうちの自我についての青年期における発達を示している。そして、自他承認

の感覚とは、対社会的においても、対自己内においても、自分自身が適切な状態にあることを表すバロメーターとしての感覚を示しているといえる。

このように、個人と社会との関係の側面である適所に対して、個人の内的心理過程の側面である同一化の統合があり、その内と外の側面のバロメーターとして自他承認の感覚があるといえる。この点に関連して、河合は、アイデンティティを内側と外側に分類している（河合，1989）。

起点として引用したものはエリクソンによるアイデンティティ達成の記述であるが、その反対のアイデンティティ拡散について見れば、アイデンティティ拡散状態に陥ると、第一の点では適所が得られず、第二の点ではこれまで自分が持っていた同一化群が統合できずにバラバラになってしまい、第三の点では自分に対して自らおよび他者から承認されるという感覚がもてなくなってしまうといえる。アイデンティティの達成および拡散は、ともにアイデンティティの状態の表と裏であるから、アイデンティティそのものの自体を考えると、社会との相互作用としての適所、同一化の統合という内的過程、自他承認の感覚という三つの側面からアイデンティティが示されるといえる。この三点のうち二点の記述をもとに、以下アイデンティティ概念の捉え直しを行う。

(1) 居場所としてのアイデンティティ

まず、エリクソンは、次のようなバーナード・ショーの言葉を引用しているが、そこから考える（Erikson, 1959）。「(青年期とは個人が)社会のある部門に自己の適所を発見する時期であり、誰しも人間は、自分たちの可能性を実現し、その影響を隣人に及ぼすまでは、社会の中でかりそめの位置しか占められない。……何人も自分の生まれに比べて上であろうと下であろうと、とにかく自分にふさわしい自然な適所を得るまでは心安らかなれない。」

この適所という言葉は、居場所と言い換えることができる。居場所の中で自分に最も心地良いものが、適所といえる。居場所は、先に示したよう

に、個人と社会の接点、自他の相互作用の側面における、自分の生きている場を主観が意味構成して捉えるものである。この居場所探し、獲得の試みは、当然青年期だけではなく生涯に渡っておこなわれるものである。

さて、以上のように、居場所としてアイデンティティを捉えようとした場合、居場所はどのように構成されているかということを、次に考えてみる。まず、現象学では、還元によって主観に回帰した後、主観による意味構成された他者と生活世界を見出す。つまり、主観において、他者と自らが生きている世界が捉えられていることを示している。この他者とは、対人関係と言い換えることができる。また、生活世界は、個人が生きている状況、すべてを指すものと考えられ、それがここで言うところの居場所そのものであるといえる。ただ、個人の生きている居場所の中で、人はさまざまな対象に打ち込んでいるといえる。このことから、居場所を構成するものとして、対人関係と対象をあげることができる。

では、居場所を構成する対人関係の側面と対象の側面について、精神分析の流れの中で、以下考えてみる。

まず、対人関係について考察する。個人のアイデンティティと対人関係の関係について、また、個人の生涯発達における対人関係の重要性については、エリクソン、ブロス、サリバンによって、生涯発達過程における重要な他者の変遷が示されている。大まかにいうと、発達過程において、重要な他者が母親→家族→友人→異性→被養育者（後に続く世代）と変遷していくことを示している（Erikson, 1959. Blos, 1962. Sullivan, 1953）。このように、人はまず対人関係において自分の居場所が成長にしたがって、変化していくといえる。また、アイデンティティ・ステータス研究における対人関係領域（親密性）の重視（高橋，1990）なども、対人関係の側面をアイデンティティにおいて重視しようとする指摘であるといえる。さらに、対人関係を重視する見方として、杉村（1995 a, b, c）は、アイデンティティを自分と他者との関係性として捉える視点を紹介し重視している。

次に、対象について考えてみる。エリクソンによる職業的アイデンティティの指摘、およびマーシャによるアイデンティティ・ステイタスにおける職業領域の提唱は、アイデンティティにおいて職業の問題が重要であることを示唆している。成人にとって職業とは、生きる糧を得るためのものであると同時に、自らの社会の中での居場所を確保するものでもある。子どもにおいても、職業にかかわる何らかの自らの打ち込む対象が必要であるし、子どもにおける遊び、大人における趣味および仕事は人間にとっての生活、活動の場としての対象であり、それらに打ち込むことは、社会、この世界の中での自らの居場所を獲得することでもある。

以上のことに関連しアドラーは、人生における課題（ライフタスク）として仕事・仲間・愛を挙げており（野田，1987）、仕事は対象に、仲間・愛は対人関係に対応しているといえる。

このように、アイデンティティを居場所という見方で捉え直すと、人は生涯に渡って居場所を得てそして探し続けていくとすることができる（小沢，1992）。アイデンティティを居場所として捉えることは、未ださまざまな概念的な整理が必要な反面、生きている人間にそった見方であり、概念として生きている人間にとっての親しみやすさがあるといえる。この点で、自らの居場所について思いをはせることは、自己理解への一歩となる道が開けてくると考えられる。

（2）物語としてのアイデンティティ

同一化とは精神分析における防衛機制のひとつであり、発達過程において子どもがある特定の大人の人物のようにになりたいと思うことを示している。この同一化は、自らの物語化といえ、願望により自らを物語の主人公として捉えることであるといえる。エリクソン（1959）は「（青年期のアイデンティティ形成は子ども時代の）同一化の有効性が終わるところからはじまる。」と述べ、青年期におけるアイデンティティ達成として、同一化群の統合を指摘している。この同一化群の統合とは、子ども時代に投げかけたさまざまな「こうなりた

い」「ああなりたい」という同一化としての理想像を、青年期に至り社会に出て現実との接点を模索する中で、ひとつのゲシュタルトとしてまとめかえることを指しているといえる。

このことは、端的に言えば、子どもとしての自分から大人になっていく自分へと自分自身を捉え直すことといえる。さらに、現在のみに限定せず、青年は未来の自分の姿を思い描く。そこには、個人の子どもの時代という過去と、社会にでていく現在、これから大人になっていくであろう未来がある。この自分の持つ自分の歴史は、子どもの時代という過去から、青年期にある現在へと自分自身がどのように成長してきたか、そして、これから将来自分がどのような人間になっていくのかという、過去から現在そして未来に渡る自己像を内包する物語であるといえる。

以上の点に関連して、都筑（1993）および白井（1993）は、時間的展望とアイデンティティの関連を研究し、時間的展望という時間軸をアイデンティティ概念に取り入れることの重要性を指摘している。このことから、筆者はアイデンティティにおける時間の二重性を強調し、アイデンティティ自体が発達していく時間的経過と、アイデンティティ自体が内包する時間とを区別すること指摘した（小沢，1994 b）。

物語という用語に関連して、河合（1989）は、ユング派の立場から神話および物語を重視している。さらに、現象学の竹田（1992）による物語という捉え方もなされている。筆者が物語をとという言葉を採用するにあたっては、現象学並びに竹田の指摘が参考になった。また、ライアンおよびマックアダムズを参考にし橋本により、エリクソンおよび西平による伝記分析・生育史心理学の中で、アイデンティティを新たに物語という視点で捉え直そうとする指摘もなされている（橋本，1996 a, b）。

このように、アイデンティティを物語として捉え直すと、生涯人間はライフサイクルという人生の軌道を辿りながら、物語を語り続けるものといえる（小沢，1992）。先に捉えた居場所とは、現在の自分の居場所について言及していた。

しかし、それぞれの個人は、現在を基準として、過去を持ち未来を持っている。この個人の内包する時間の流れ、歴史を、その個人の物語として、捉えようとすることは、それぞれの人の自己理解に寄与するものと考えられる。

7. 居場所と物語についての考察

ここでは、居場所と物語を生き生きとした概念として、理論化していくことを考えていきたい。まず、考慮すべきことは、居場所も物語も個人が主観において意味構成したものである。先に示したように現象学的視点に立って、アイデンティティを捉え直そうとしているが、その際に、主観の意味構成という見方を現象学より取り入れている。つまり、個人そして人の心は、居場所と物語を生きる中で、意味構成し続けているものとして捉えられる。

以下、居場所と物語についての考察を行い、概念整理のための図式化を行う（図1, 2）。

(1) 居場所と物語の関連

先に示した河合（1989）のアイデンティティを内と外に分けるという指摘を考えると、居場所は外に、物語は内に相当すると考えられる。しかし、居場所と物語とは、明確に分離されるものではない。先に示した物語における自分とは、過去の自分であり、現在の自分であり、未来の自分である。ここでいう自分とは、その時点で生きていた、生きている、生きているであろう自分自身の居場所に他ならない。過去や未来の自分の姿の想定には、

外界とは孤立した自分の姿ではなく、まさに対人関係と対象の中で生きている自分の居場所こそが、自分の姿であるといえる。つまり、物語とは、過去・現在・未来に渡る自分であり、現在の自分が構成した、過去から現在そして未来への自分の居場所であると考えられる。過去・現在・未来の自分の居場所を語ることが、その個人の物語となるといえる。このことから、物語は、過去、現在、未来への自分の居場所であり、時間を内包するものとして捉えられるべきであるといえる。

このように、居場所と物語とは、現在を起点とした過去から現在そして未来の個人が内包する時間の流れの中で、関連しているといえる。

(2) 居場所と物語の重層構造としてのゲシュタルト

これまで筆者は、居場所と物語の関連を、外側として社会に自分から架ける橋と、内側として自分自身に架ける橋という、二つの架け橋モデルにおいて捉えていた（小沢, 1992, 1994 a）。

しかし、そのような見方よりも、さまざまな要素が重複した重層構造をしているものと考えたほうが良いと考えられる。というのは、ひとりの個人は生活していく中でいくつもの対人関係といくつもの対象をもち、つまり、居場所群をもっている。個人の持ついくつもの居場所が、重複した重層構造をなす個人としてのゲシュタルトを示していると見るの方が心の複雑さに迫り得る。同様に、物語においてもひとりの個人はおそらくいくつもの物語をもち、その物語群は個人の中で重

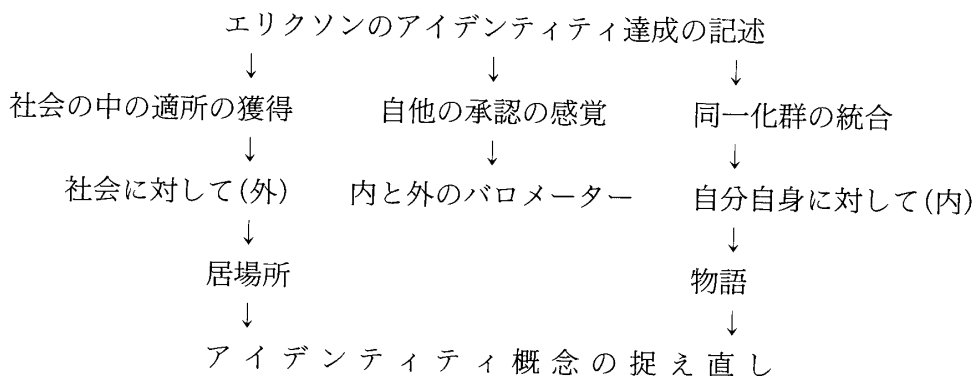


図1. アイデンティティ概念の捉え直し

複した重層構造をなしひとつのゲシュタルトをなしているのであると考えられる。そして、過去・現在・未来の居場所の流れが物語であるから、言ってみれば時間的空間的にいくつもの居場所の流れ（＝物語）がひとりの個人において、これは暗黙の内にさまざまな布置をとりゲシュタルトをなしているといえる。

これは、小此木（1974）がアイデンティティを「……としての自分」の統合と述べたこととも関連している。また、レビンソンは、生活構造という概念によってさまざまな要因、側面が重なり合った成人期の発達を捉えている（Levinson, D.J., 1978）。この生活構造という見方は、いくつもの側面を切り捨てずに構造として配置して取り入れようとするものであり、このレビンソンの見方を取り入れて重層構造という見方をここで行ったのである。

さらに、つけ加えると、この重層構造のゲシュタルトの変化が、アイデンティティの危機であり、居場所を替えることであり、物語を書き換えることであるといえることができる。また、このゲシュタルトが、個人において生き生きとしている場合をアイデンティティ達成といい、まったく構造をなしていないで生き生きとしていない場合をアイデンティティ拡散といえることができる。

（3）居場所と物語の変容

前項の最後に示したように、生涯発達というアイデンティティの見方にたつと、居場所と物語は生涯変化し続けるといえる。

居場所の転換は、現実の生活の中で、進学、就職、結婚、転職、退職などさまざまなでき事として起こる。そして、個人がある居場所を離れる際には、次の居場所探しが始まる。この居場所探しにおいては、さまざまな現実的状況の影響が関わってくるといえるが、個人の中で基準となるものは、その個人がもつ物語であるといえる。つまり、その人のもつ未来の自分の居場所の像が、新たな居場所探しの指針となる。このことは、居場所探しに物語が影響を与えていることを示している。

また、自らがもった居場所は、過去の居場所として自分の物語に取り入れられる。順次、過ぎていく居場所は、物語として個人の意味構成の材料とされる。さらに、個人にとって強い印象を与える居場所は、過去のその個人の持つ居場所、つまり、物語を書き換える影響を与えることもあり得る。このことは、居場所が物語の書き換えに影響を与えていることを示している。

以上のように、居場所と物語は、相互に影響を与えていることが指摘される。

（4）他者との共存のための居場所

まず、居場所について他者との関係から考える。個人ひとりひとりがもつ居場所の集合体が、社会であるといえる。言ってみれば、個人の居場所のあり方が、大きくはその集団、社会のあり方を支え、方向付ける可能性もあると考えられる。とすると、ひとりひとりが自分にとっての社会の中での適所を獲得することは、結果としてよりよい集団、社会を形成することにつながっていくと考えられる。このような居場所の集合体としての社会という見方は、社会全体を想定すると拡散してしまうが、家族や学級という集団を想定した場合、有効な見方になり得ると考えられる。

筆者は、かつて登校拒否を示す青少年のための宿泊施設に勤務していた際に、同僚たちとともに、彼らひとりひとりの施設内の物理的および心理的居場所を辿っていく視点を取り入れたことがある。この視点は、集団として彼ら全体を見る上でも、個として彼らを見る上でも、この施設で彼らに何が起こっているかを見る上で、有効なものであった。

社会の中で人間は一人で生きて行くのではなく、他者とともに生きている。そこでは、自分とは異なる他者との共生・共存が必要である。そして、自分の居場所の確保だけでなく、他者の居場所について考慮することも、必要になるし、居場所の集合体としての集団のあり方を考えることも必要になることがあるといえる。

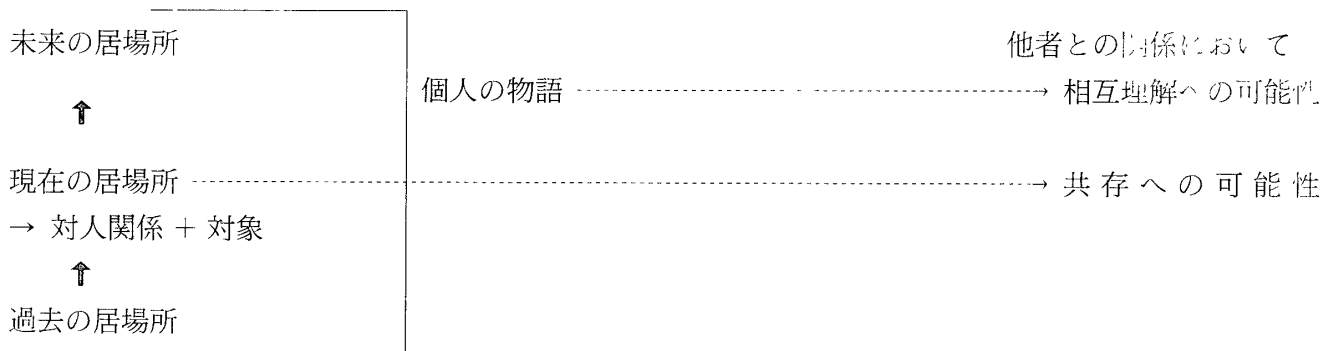


図2. 居場所と物語の関連および他者との関係

(5) 他者との相互理解のための物語

物語とは、自分のことを理解するための物語であるが、さらに、他者との相互理解としての物語の役割があるといえる。相手のことを知りたいと思ったり、自分のことを知ってほしいという時に、相互に物語が交換される。自己理解に加えてこの相互理解も、物語の役割といえる。つまり、相互に理解するためには、現在の自分および他者を知るだけでは、われわれは互いを充分理解したと思えない。過去そして現在さらには未来の自分を互いに語り合い理解し合うことによって、われわれは相互に理解したと思えるといえる。

このような相互理解は、異なる個人同士の居場所の創造に寄与するものと考えられる。つまり、物語の相互理解が、異なる個人同士の適所としての居場所づくりに影響を与えることがあり得ることが示唆される。

(6) 現実の生活の中での意識される居場所と物語—その危険性

人は常に、自らの居場所について意識しているわけではない。居場所がなくなった時、居場所の転換を迫られたときに、居場所について意識する。これは、青年期におけるアイデンティティ危機として示されているように、子どもとしての学校や家庭の中での自分の居場所から、大人としての社会の中での自分の居場所を模索に青年が悩むことが例として挙げられる。

同様に、物語についても、人は常に過去から現在そして未来への自分の物語を想起しているわけ

ではない。また、自らの物語を完全なものとして構成しようと試みることは、永遠不滅・完全孤立のアイデンティティ観にもどってしまう。そうではなく、物語とは、何かの折に自己確認のためにふと想起されるものである。自分が分からなくなったときとか、自分を知りたくなったときに、ふと自分の物語を想起し、自分を確認するのである。

居場所探し、適所探しを強調すると、現実の日常を無視し、ありもしない宝探しになってしまう危険性がある。逆に、あまりに性急に居場所を求めるあまり、権威者の指定する居場所におさまってしまう危険性もある。

同様に、物語に関しても、現実を無視したあまりに肥大した自己愛の産物として物語が語られてしまう危険性がある(小沢, 1992)。また、居場所と同様に、物語を性急に求めるあまり、極端なイデオロギーや権威者の付与する物語を自分の物語として取り入れてしまう危険性もある。

8. このような捉え方によってどれだけ自己理解が可能となったのであろうか？

居場所と物語という言葉を用いて以上のように、アイデンティティ概念を捉えたことは日本語にはないアイデンティティという言葉に関して親和性を追求した試みであると考えられる。

また、居場所と物語が暗黙裏に重層構造のゲシュタルトをなしているというモデルで捉えることは、ある概念について次元を設定して量化し数値化することとは、異なった研究のパラダイム・心のモデルをもつものである。次元化した量的な心

のモデルよりも、重層構造のゲシュタルトとして心を捉えた方がより、現実には生きている我々の心に近いのではないかと考えられる。

さて、以上のようにアイデンティティ概念の捉え直しを行ったわけであるが、自己理解にどのくらい有効かという点に関しては、ただ単にある程度の論理的整合性を得られた見方を行っただけでとどまったといえる。この捉え方の有効性を確かめるために、実際にこの捉え方を一般者に提示してそのコメントを得るという対話的研究の方向性が求められる(小沢, 1996 b)。さらに、個人の居場所や物語の重層構造を解明していくという研究が必要とされる。しかし、当然、暗黙のものを紐解くわけであるからその困難さに直面する。現在、アイデンティティ概念をこのように捉え方をした上で、データをとるどのような研究が可能か試行錯誤をしている最中(小沢, 1996 c)であるが、この点においては、今後も継続して検討を行ってきたい。

引用文献

- 東洋他 1985 対談：こころを科学する 理想6 No.625 理想社
- Erikson, E. H. 1950 *Childhood and Society* W. W. Norton (仁科弥生訳 1977 幼児期と社会 みすず書房)
- Erikson, E. H. 1959 *Psychological Issues: Identity and the Life Cycle*. International Universities Press. (小此木啓吾訳編 1973 自我同一性—アイデンティティとライフサイクル—誠信書房)
- Blos, P. 1962 *On Adolescence* The Free Press (野沢栄司訳 1971 青年期の精神医学 誠信書房)
- フッサール, E. 1974 ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学 細谷恒夫・木田元訳中央公論社
- フッサール, E. 1972 現象学「ブリタニカ論文」木田元・宮武昭訳 現代思想 vol. 6-43. 総特集フッサール 青土社
- 橋本広信 1996 a アイデンティティはライフストーリーである 日本教育心理学会第 37 回大会論文集
- 橋本広信 1996 b ライフストーリーメタファーによるアイデンティティへの接近 日本青年心理学会 第 4 回大会論文集
- 河合隼雄 1989 生と死の接点 岩波書店
- Levinson, D. J. 1978 *The Seasons of a man's life*. Ballantine Books (南博訳 1992 ライフサイクルの心理学 講談社)
- Marcia, J. E. 1966 Development and validation of ego-identity status *Journal of Personality and Social Psychology*, 3, 551-558.
- 宮下一博 1993 Marcia 法をめぐる問題点と今後の課題 日本青年心理学会第 1 回大会論文集
- 無藤清子 1994 対談：アイデンティティ概念をめぐる 日本青年心理学会ニュースレター第 3 号
- 西平直喜 1983 青年心理学方法論 有斐閣
- 西平直喜 1978 講座・アイデンティティ(一) 青年心理 11 月号 金子書房
- 西平直喜 1996 生育史心理学序説 金子書房
- 西平直 1993 エリクソンの人間学 東京大学出版
- 野田俊作 1987 実践カウンセリング ヒューマンギルド出版
- 岡本祐子 1991 自己実現をめぐる 臨床心理学大系第 3 巻ライフサイクル 金子書房
- 小此木啓吾 1974 概説・アイデンティティ論 現代のエスプリ アイデンティティ No.78
- 小沢一仁・高木秀明 1988 追跡面接による青年期の同一性達成過程における葛藤の焦点 横浜国立大学保健管理センター年報 8
- 小沢一仁 1991 青年と社会 山添正編著 現代日本人のライフサイクル プレーン出版
- 小沢一仁 1992 人それぞれが創る物語 山添正編著 現代日本の子どものエコロジー プレーン出版
- 小沢一仁 1994 a 心理学のパラダイムからみたアイデンティティ・モデルの模索 帝京学園短期大学研究紀要 第 6 号
- 小沢一仁 1994 b アイデンティティ・時間的展望 第 1 回日本青年心理学会テーマ・セッション記録 日本青年心理学研究第 1 号
- 小沢一仁 1995 アイデンティティ論から物語論への模索 帝京学園短期大学研究紀要 第 7 号
- 小沢一仁 1996 a アイデンティティを居場所と物語として捉え直す概念的試み 日本発達心理学会第 7 回大会学会発表論文集
- 小沢一仁 1996 b 現象学的アプローチを用いた青年の自己理解のための対話的研究の模索 帝京学園短期大学研究紀要第 8 号
- 小沢一仁 1996 c 自由記述による自己理解をめざしたアイデンティティへの接近 日本青年心理学会第 4 回大会論文集
- 落合良行 1993 青年の理解 青年の心理学 ミネルバ書房

- 落合良行 1994 青年心理研究における3方法：「観る」「確かめる」「伝える」青年心理学研究第6号
- 白井利明 1993 青年期と中年期の時間的指向性に関する研究—ポジティブな現在指向の検証—日本青年心理学会第1回大会論文集
- 杉村和美 1995 a 青年期における自我同一性—関係性の観点からの再概念化について—日本教育心理学会第37回大会学会発表論文集
- 杉村和美 1995 b ヨーロッパにおけるアイデンティティ研究の現状 日本青年心理学会第3回大会論文集
- 杉村和美 1996 関係性からアイデンティティをとらえる試み 日本青年心理学会 第4回大会論文集
- Sullivan, H. S. 1953 The Interpersonal Theory of Psychiatry. W. W. Norton. (中井久夫他訳 1990 精神医学は対人関係である 誠信書房)
- 高橋裕行 1990 「親密性地位」の検討と同一性地位と親密性地位との連関における性差の検討 教育心理学研究第38巻3号
- 高村和代 1996 アイデンティティ形成のプロセスについての検討 日本発達心理学会第7回大会論文集
- 竹田青嗣 1992 自分を生きるための思想入門 文芸社
- 鏑幹八郎 1990 アイデンティティの心理学 講談社
- 都筑学 1993 自我同一性地位による時間的展望の差異 日本青年心理学会第1回大会論文集